

公益社団法人 2020年度 第4回理事会

1.開催された日時：2020年12月10日 16:30-18:30

2.開催された場所 web会議システム（Zoom）による実施

3.理事総数及び定足数

総数 21名 定足数 11名

4.出席理事数 21名

（出席）増田隆一、小川宏人、田村宏治、出口竜作、稲葉一男、蟻川謙太郎、神田真司、兵藤晋、深津武馬、杓掛磨也子、吉田薫、柴小菊、鈴木信雄、浅見崇比呂、阿部秀樹、寺北明久、日下部岳広、彦坂暁、富岡憲治、岡田二郎、広瀬裕一

（監事出席）高橋洋、八杉貞雄

議事録署名人は、定款35条2項により、稲葉一男会長、高橋洋、八杉貞雄両監事

5.報告事項

会に先立ち、メールにて回覧されていた2020年度第2回理事会議事録が承認された(資料1)

1) 会長報告（稲葉会長、資料2）

2020年10月に学術会議会員任命拒否問題が起き、生物科学学会連合から、緊急声明を出すことに対する賛同依頼があり、理事に諮り、対応した旨説明があった。また10月6日には理事連絡を開催、今後も機会があれば、連絡会を開催したいという希望が述べられた。フォトコンテスト開催提案、本会の重要な賞のひとつである日本動物学会女性研究者奨励OM賞内規、2021度米子大会開催については、本理事会で審議を行う旨、説明があった。また、柴小菊理事を広報担当に、阿部秀樹理事はIT担当として職務を分けること、また、自然史学会連合への学会代表は後藤太一郎会員より、古屋秀隆会員へ学会代表を交代していただいた旨報告された。

2) Zoological Letters について（深津理事）

Zoological Letters の掲載論文数が減少しているため、会員には奮って投稿をお願いしたいとの依頼があった。

3) 米子大会準備状況（彦坂中国四国支部長/理事、資料3）

鳥取大学の椋田会員を中心として準備委員会で引き続き準備を進めている現状の説明があった。11月19日に大会準備委員会のオンラインの担当者とIT委員会の阿部理事の参加を得て、実務の説明会を行った。12月1日本部と大会準備委員会でのオンライン懇談会を

開催、その内容に基づいて資料を作成した。基本方針は、予定通り第92回大会を鳥取県米子市コンベンションセンターで9月2日から4日まで3日間、またその前後にサテライトシンポジウム等を開催すると報告された。準備委員会としては昨年とほぼ同様のスケジュールで準備を進めたいが、コロナ感染拡大状況を鑑み、その場合はオンラインに一本化することが基本的な方針である旨説明された。

オンサイト開催方針では（議事資料とは異なる）以下の訂正がある旨、説明があった。

1. 感染リスクの高いポスター発表、懇親会、動物学広場は行わないということを12月1日の懇談会で決めた。可能であれば感染対策を十分にとって実施する可能性を探りたい。
2. 発表は基本的にオーラルで行う。高校生の発表は、例年はポスター発表となっているが、発表は相当数の数に上るため、オーラル開催とすると、会場の準備と時間が難しく、今後、準備委員会で今後さらに検討したい。
3. 会場の鳥取県がイベント開催のガイドラインを作成しており、これに従って、鳥取県にも確認をしながら、準備を進める。

オンライン開催となった際には、発表形式は今年度行った大会での発表形式に準じる。一般発表、ポスター発表はLincBizを使い、シンポジウム、本部企画、総会はオーラルでおこないたい。その上で、準備委員会、IT委員会、本部の役割分担をしておくべきだろうということで話し合いを進めている。具体的には、参加登録、演題登録（ここまでは学会事務局の業務）、プログラム作成等のプロセスはオンサイトでやろうがオンラインでやろうがほぼ共通であるので、これらは準備委員会が担当する。LincBizの演題チャンネルの準備、発表者登録、参加者登録なども準備委員会が担当する。当日のシンポジウムや関連集会のZoomのサポートなども準備委員会が担う。こういう業務に備えて、資料に書いてある通り、準備委員会の中にオンラインの担当として4名を置く。IT委員には今年の実験を踏まえ、各種のマニュアルの提供であるとか、プログラムのソースコードを作成したとのことなので、準備委員会のちょっと力に余るような業務支援をお願いする。

最後にオンサイトにするかオンラインにするかをある時期に決定しなくてはならないが、まず第一に米子コンベンションセンターのキャンセル料が発生する時期があり、2月頃に第一回目の判断を行いたいとの説明がなされた。その後、第二の検討時期としては、演題募集の前の4月頃に最終決定を行いたいとのことであった。その後、オンサイトで実施すると決めてもその後のCOVID-19や世情によっては最小限の変更でオンラインにすることもありうるという説明がなされた。

4) 寄付委員会報告(加藤寄付担当理事、資料4)

委員会では、寄付受入れの現状を委員で共有をして、修正すべき点を幾つか洗い出した。

最初に、税控除団体として認定を受けるための100件以上の寄付件数は、2019年は136件であった。非会員の方からの6件が金額的に一番大きく、構図としては会員からの100件以上の寄付によって税控除団体としての認定を受け、その結果、大口の寄付をくださった非会員の方々の税控除を実現している、ということになり、新理事へ特に理解いただきたいとの説明があった。

Webでは会長メッセージを含め、いくつか修正したい点があり、今後、IT委員会、事務局と相談の上、修正を行いたい旨説明があった。修正に関しては、寄付委員会で、寄付を行う流れなども確認、シュミレーションなどを行い、検討した上で改めて理事会に諮るとのことであった。

5) COVID-19 影響下での支部活動状況(神田庶務理事、資料5)

先日、北海道支部の増田支部長から、これから支部活動どういう風に行っていくのかということで各支部の現状、活動状況を知りたいという非常に重要なご意見をいただいたため、支部活動の状況を問い合わせ、まとめた報告がなされた。7支部中、既にオンライン大会あるいは講演会を実施済みが3支部、これからオンライン大会を決定しているのが1支部、前向きに検討が2支部、一部例会では実施しているものの支部全体としての大会は未定であるという支部もあった。それぞれの方法に関しては資料にまとめてあり、今後各支部で活動を活発に行っていくにあたり、参考にされ、支部長間で連絡を取り合い、参考になる方法があれば是非取り入れて頂きたいと報告された。

増田北海道支部長より、200人規模で開催された関東支部でのシステムについて、Zoomやウェビナーの利用方法、料金体系などについて、質問があった。

6) その他委員会報告(稲葉会長)

報告事項の最後、その他委員会報告ということで皆さんには本理事会に先立ち、報告をDropboxにアップロードしてある旨が報告され、理事一同で各委員会報告の確認を行った。

審議事項

第一号議案 学会賞等選考委員会委員選出(神田庶務理事)

事務局宛に届いた投票用紙は、神田庶務へまとめて送付された。前もって兵藤理事立ち合いの元に開票作業が行われ、7分野の最多数得票者が、本理事会で公表された。2021年度学会賞等選考委員会委員となることが全員一致で承認された。

第二号議案 OM賞・茗原真路子研究奨励助成金の審査方法について(富岡賞選考理事、資料7)

OM賞、茗原真路子研究奨励助成金はいずれも公益社団法人の事業として外部にも広く

展開している。これまでの選考については内部で選考委員会を構成してきた。公益社団法人として選考の透明性を高めるために、本部役員と賞担当理事とで検討した結果、外部委員を取り入れる方向で提案したい。OM 賞については内規がなかったので内規案を作成した。その過程で透明性を高めるために外部委員を入れるということになった。茗原助成金については既に内規があるのでそれを修正して、外部委員を加える案、および、関連学会とは何か、その選び方、依頼の方法、外部委員はどのような方がふさわしいかなどが審議、検討された。その結果、提案された内規案は一部修正の上全員の承認を得て、この議案は可決された。

第三号議案 フォトコンテスト企画について(稲葉会長、資料 8)

各支部長から支部での意見について以下の概要説明がなされた。

増田北海道支部長：メールで議論した。負担が大きいのでは？本部で主催、支部でサポート希望。いつからできるかは未定。

出口東北支部長：今までやっていたことなので、全国で取り上げられるのは喜ばしい。東北支部は、支部中心で支部のやり方で行い、選出した作品を本部へ送る方が良いとの意見も出ているが、まだ結論ではない。

深津関東支部長：実施については賛成。実施方法については色々意見あり。

鈴木中部支部長：実施については賛成。あまり支部活動が活発ではないのだが、これをきっかけに活性化されているので良い。

寺北近畿支部長：ポジティブではない意見もあり、トップダウンの支部活動は初めての試みでは？実施方法についての意見多数。めいっぱい活動しているので、やるとなると支部活動全体を見直して整理する必要がある。

彦坂中国四国支部長：実施については賛成。実施方法については意見あり。募集カテゴリーは多すぎるかも。応募数が少ないと思うので、もう少し大きなカテゴリーで。

岡田九州支部長：実施については賛成。実施方法については意見あり。広報活動の方法と負担について、募集カテゴリーは多すぎるかも。

これらをうけ、稲葉会長から統括のコメントがあった。概ね実施については、賛同を頂いていると考えている。一方で コロナ感染拡大の中、外へ出ることが難しいという状況もある。支部の意向を尊重し、実施を目指すということで、各支部から集まって意見を支部に持ち帰り、引き続き、各支部で検討を行うこととなった。

第四号議案 米子大会開催について(稲葉会長)

オンサイトかオンラインかという判断時期は、会場のキャンセル料が発生する 2 月と、参加

登録が始まる4月。例えば米子コンベンションセンターの都合などを受けて判断するなど
プラティカルな判断をする必要がある。方針決定は準備委員会と本部で検討して(理事会は
開かずに)判断する。決定については理事会へ報告するという形にすることを承認して頂き
たいと会長より、説明があり、承認された。

2020年12月10日

上記の内容で相違ないことを証するため、ここに記名押印する。

議長 稲葉 一男

議事録署名人 高橋 洋

議事録署名人 八杉 貞雄

公益社団法人日本動物学会 2020 年度第二回理事会

1. 開催された日時 9月3日(木)16時00分~18時15分

2. 開催された場所 web 会議システム (Zoom) による実施

3. 理事総数及び定足数

総数 20名 定足数 11名

4. 出席理事数 19名

(出席)山下正兼・勝 義直・小金澤雅之・渡邊明彦・岡 良隆・兵藤 晋・加藤尚志・深津武馬・武田洋幸・稲葉一男・後藤太一郎・松田恒平・志賀向子・沼田英治・植木龍也・浮穴和義・岡田二郎・小柴和子・吉田 学

(欠席)飯田 弘

(監事出席)八杉貞雄・高橋 洋

理事出席者 19名、監事 2名の出席を得て、理事会は成立となった。議長は、岡良隆理事。議事録署名人は、定款 35 条 2 項により、岡 良隆会長、八杉貞雄、高橋 洋 両監事。

オブザーバーとして、新理事候補者、各委員会委員、倉谷 ZL 編集長の出席があった。

5. 報告事項

会に先立ち、先だってメールにて回覧されていた 2020 年度第 1 回理事会議事録が承認された。

1) 会長報告(岡 会長)

通常は年次大会前日に大会会場で実施するところ、コロナ禍でオンラインでの開催となったが、例年通り、理事会メンバー以外にも各種委員会委員のオブザーバー参加をお願いしたことが報告され、出席者に感謝が述べられるとともに、理事会メンバーの世代交代を進めるためにもこの仕組みを続けて欲しい旨希望が述べられた。

翌日の総会で任期が満了することが述べられ、次期理事に向けて事務的な注意点が述べられた。

2) 2020 年オンライン大会準備状況報告(岡 大会長)

コロナ禍により、米子での大会開催を延期し、オンライン大会としたことの経緯が改めて示された。大会規模は 1.5 日間に縮小したが、最終的に本部企画シンポジウム 1 件 3

演題，公募シンポジウム 3 件 16 演題，一般演題 250 演題となり，参加者は一般会員 333 名，学生会員 341 名，非会員 29 名，招待講演者 4 名，アルバイト 4 名の合計 711 名となったことが報告され，大会運営及び米子大会関係者への謝意が述べられた。

3) 2021 年米子大会準備状況報告（植木 理事）

米子大会は来年にスライドして 2021 年 92 回大会として開催することが改めて報告された。会期は 2021 年 9 月 2 日～4 日とし，当初の予定通り、米子コンベンションセンターと米子市文化ホールを使用することが関係機関と調整済であるが，懇親会はコロナ禍の状況次第で変更する可能性がある。準備委員会は今年度のメンバーが全員引き続き務める。鳥取県及び米子市の支援は引き続き需給予定であり，および今年度採択された科研期研究成果公開促進費についても，来年度へのスライド使用が可能なことが報告された。

4) 2022 年東京大会準備状況報告（加藤 理事）

東京大会も 2021 年から 2022 年にスライドすることになり，早稲田大学の使用を改めて交渉していることが報告された。日程はまだ未定であることがあわせて報告された。

5) 2023 年山形大会準備状況報告（渡邊 理事）

2023 年に山形大学小白川キャンパスで開催すべく，準備中であることが報告された。

6) ZL 編集長報告（倉谷 ZL 編集長）

2019 年の IF は 2.07 であり，かろうじて 2 を維持していることが報告された。2020 年のこれまでの掲載論文数は 10 報であり，投稿数も 32 件で，過去数年のなかでは一番少なくなっている。投稿数の減少がコロナ禍の影響か，APC 有料化のせいかは今のところ不明である。2019 年以降の傾向として日本からの投稿が減っており，外国からの投稿の比率が高くなってきた。雑誌のクオリティと IF の維持のため，投稿と論文引用を積極的に行って欲しい旨，要請があった。

7) ZS 編集主幹報告（沼田 ZS-EIC）

2020 年当初から変更になった編集体制について，改めて説明があった。特に，動物学会員が少ないが投稿が多い分野のカバーのため，最近新たに哺乳類の行動生態を専門としている東邦大の井上先生を AE として加えたことが示された。IF 0.843 でほぼ横ばいである。今年から early view を始めた。直接 ZS の Web サイトから見るできるので，IF 等には一定の効果があると考えている。2020 年は 4 号まで出版済であり，5・6 号の内容も決まっっていて，年間 66 論文と例年通りとなっている。採択論文は，国別に見ると日本が一番多いが，その他では中国，韓国が多い。全体の採択率は 40% である。最終決定まで大体 1 ヶ月程度と比較的迅速に行われている。投稿数も大体安定している。

一方で，動物学会員が少ないマクロ分野（生態・行動・分類・系統・進化）からの投稿

が多く半分を超えており、受理論文は全体の 2/3 を占めている。この分野の偏りの善し悪しは判断できないが、これまで動物学会を支えてきた発生・生理・内分泌とかのミクロ分野が全部あわせても 1/4 くらいしかないのは残念であり、是非とも論文を投稿してほしい旨、要請があった。

8) 寄附委員会報告（小金澤 理事）

2019 年度の寄附は 136 件、総額が 2,715,400 円であることが報告された。6 月の会費納入時に併せてお願いしていることもあり、6 月以降の寄附が 94 件と大部分であった。2012 年からの状況を見ると件数がやや減っている。OM 賞の原資である大場さんや今回の茗原助成金のような、大口の寄付者に税額控除団体としてメリットを受けていただきたいというのが、寄付数を確保することの理由の一つである。今後も寄付数は維持する必要があるので、年会費請求時のお願いを続けるのと同時に、様々な広報活動を行う必要があることが示された。

9) 関東支部会報告（兵藤理事）

オンライン公演会の実例として、関東支部会で 2020 年 8 月 23 日に開催された公開講演会の開催・運営状況が報告され、今後の公開講演会のあり方やオンラインでの運用法について議論が行われた。

6. 審議事項

第一号議案 支部代表委員について

2020 年の選挙において、多くの支部で支部代表委員の割当てがなくなってしまい、激減してしまっただけでなく、これは支部代表委員の定数を出す母数が各支部の一般会員数であり、昨年の定款改正で多くの定年後の会員が高齢会員に移行し、一般会員数が減少したことが直接の原因である。賞等選考委員会委員の選出母体である支部代表委員の数が減ることは学会にとって良いことではないため、支部代表委員の今後の職務も含め、今後どのような方策をとるべきかを議論した。今回は議論のみで留め、具体的な方策は次期理事会で検討するよう、申し送りすることとなった。

第二号議案 OM 賞等各賞の規程について

OM 賞をはじめ、多くの賞の選考規程に穴があり、賞金の運用における間接経費の取扱い等で授賞者に問題が生じさせていることが報告された。これも現理事会で決定するには時間が無いため、次期理事会執行部で原案を作成し、次期理事会で検討を進めるよう申し送りすることとなった。

その他

本理事会を持って、理事・監事の任期が満了となるため、本期を持って退任する理事より、退任の挨拶があった。

次回(2020年度第3回理事会)は2020年9月4日(金)14時から開かれる社員総会での理事選出終了後直ちに、オンラインで開催する予定である。

令和2年 9月 日

上記の内容で相違ないことを証するため、ここに記名押印をする。

議長 岡 良隆

議事録署名人 八杉 貞雄

議事録署名人 高橋 洋

理事活動報告（2020年9月～12月）

（会長 稲葉一男）

会長活動報告

2020年9月

- ・岡良隆前会長より、会長の職務引き継ぎを行なった（9月10日）。
- ・賞担当理事及び学会役員により、東レ科学振興会への推薦、井上科学財団の学会推薦審査を行なった（9月15日）。
- ・日本学術振興会科研費「国際情報発信強化」の代表者変更を行なった（9月28日）。

2020年10月

- ・茗原眞路子研究奨励助成、OM賞、成茂動物科学振興基金に関連し、寄付者に学会の近況報告と会長交代の挨拶を行なった（10月1日）。
- ・政府による学術会議会員候補者の任命拒否に関して、生物科学学会連合から動物学会に声明への賛同依頼があり、理事メンバーの承認をとりつつ対応した。（10月4日）。
- ・新理事メンバーの顔合わせならびに業務確認のために、理事連絡会を開催した（10月6日）。
- ・フォトコンテストに関連して、東北支部長及び関係者と連絡を交わした。また、各支部長にフォトコンテストに対する支部の意見の取りまとめを依頼した（10月15日）。
- ・本部役員、事務局による会合を開催した（10月20日）。

2020年11月

- ・OM賞前選考委員長と賞の趣旨、選考について打合わせした（11月4日）。
- ・会長の挨拶をホームページに掲載した（11月6日）。
- ・賞担当理事及び学会役員により、OM賞並びに茗原眞路子研究奨励助成の選考にかかる内規案の作成を行なった（11月19日）。
- ・職務の効率化のため、2名の広報・IT担当の指名理事の役割分担を設けた（広報担当：柴理事、IT担当：阿部理事）（11月24日）。

2020年12月

- ・各種学会連合への動物学会代表を以下の通り確定した（12月1日）。
生物科学学会連合（会長）、自然史学会連合（古屋秀隆）、昆虫学会連合（高梨琢磨）、日本光生物学協会（寺北明久）
- ・2021年の米子年次大会に関し、本部役員と大会準備委員会との懇談会を開催した（12月1日）。
- ・本部役員、事務局による会合を開催した（12月2日）。

- ・2020年第4回理事会を開催した（12月10日）。

理事会報告 米子大会準備状況

- ・ 11/19：大会準備委員会オンライン担当者と広報・IT 委員会の間で IT 系実務の説明会
- ・ 12/1：学会本部と大会準備委員会の懇談会

基本方針

予定通り第 92 回大会を鳥取県米子市で 9 月 2 日（木）～4 日（土）会期 3 日間（ただしサテライトシンポジウム等を会期前後）で開催する。準備委員会として、オンサイト開催については基本的に昨年とほぼ同様のスケジュールで準備を進める。ただし COVID-19 の状況によってはオンラインへの切り替えもありうる。オンサイト開催が困難と判断した場合には、オンサイトとオンラインのハイブリッド開催はせずに、オンラインに一本化する。

オンサイトの場合の方針

- ・ 感染リスクの高いポスター発表、懇親会、動物学ひろば、は行わない。
- ・ 発表はオーラルで行う。
- ・ 感染対策等（アルバイトを含めた消毒等）は事務局が案を作成し、本部主導で行う。

オンラインの場合の方針

- ・ 発表形式は 2020 年度の大会の形式に準ずる（一般発表・高校生ポスターは LincBiz ポスター。シンポジウム・本部企画・総会のみオーラル）。
- ・ オンラインになった場合の、準備委員会、本部、IT 委員会の役割を決めておく。
- ・ 参加登録、演題登録、プログラム作成等のプロセスはオンサイトの場合とほぼ共通であり、準備委員会が担当する。
- ・ LincBiz の演題チャンネル準備、発表者登録、参加者登録も準備委員会が担う。
- ・ シンポジウム、関連集会の Zoom サポートも準備委員会が担う。
- ・ 上記の業務に備えて、準備委員会内にオンライン担当を設ける：植木（広島大）、彦坂（広島大）、吉田（島根大）、山口（島根大）
- ・ IT 委員会には、各種マニュアルの提供、演題検索プログラムのソースコード提供、その他準備委員会で処理しきれない場合の IT 業務支援をしていただく。

オンサイトかオンラインかの決定時期

- ・ 第 1 決定時期：キャンセル料の発生する前（2 月？ 要確認）
- ・ 第 2 決定時期：募集開始前（4 月？）
- ・ その後どうしてもダメになったら、そのタイミングで最小限の変更でオンライン化（6 月頃？）。

寄付委員会の理事会報告事項（2020年12月10日）

下記の通り、寄付委員会で検討されたWEB記載内容等の変更に着手します。

会長、執行部、関係する委員会のご協力をお願いします。

2020年12月9日寄付委員会議事より

2019.7～2020.6の寄付実績

	非会員の合計額	会員の合計額	総計
合計金額=	¥ 2,026,000	¥ 689,400	¥ 2,715,400
合計件数=	6件	130件	136件

- ✓ 寄付金額の大部分は非会員からであり、定常的にはOM賞の原資
- ✓ 会員からの寄付件数は漸減傾向にある

【会長、理事会執行部へ依頼する案件】

寄付募集の趣意文の変更（WEB）

- 寄付募集の会長名趣意文の会員向けと一般向けの趣意書を用意する。（訴える内容が異なる点がある）
- 寄付金使途を具体的に明示する。（動物学の振興、国際連携、男女共同参画、動物学情報のアーカイブ化等々）

【事務局経由IT委員会】へ依頼し、次の項目とともにWEB記載内容を変更する。

- 寄付申し込みのWEB画面のつくりを変更し、寄付者が事務局へメールを送付する手間を省略可能にする。
 - ✓ 現行のWEBに提示している下記の銀行／郵貯口座情報を削除する。
 - ✓ 現行のWEBの寄付申し込み画面にある「お支払い情報」の「動物学振興のため、国際動物学会議、男女共同参画、学会が必要とする活動」の選択入力欄を抹消する。
 - ✓ 寄附申し込みのプロトコルを下記へ変更する。

「寄付申し込み」をクリック

クレジット／銀行振込／郵貯振替の選択

必要事項の入力（寄付者情報・寄付額・特段の使途などについてコメント欄）

事務局へ寄付受付の自動送信

【広報委員会との連携案件】

- 寄付を募る機会に工夫を加える。（イベントの写真付きでWEB広報、イベント会場でパンフレット配布）

【事務局との連携案件】

- 各支部別の寄付実績データ（事務局作成）を各支部へフィードバックする。（寄付文化の定着へ会員を誘導）

寄付金募集のWEB画面

<https://www.zoology.or.jp/>



公益社団法人 日本動物学会への寄付のお願い <https://www.zoology.or.jp/about/donation>

公益社団法人 日本動物学会

会長 稲葉一男

日頃より、学会活動をご支援頂き、誠にありがとうございます。さて、平成24年7月を持ちまして、本会は公益社団法人化しました。従来なら、公益法人化とともに自動的に「税控除団体」になるはずでしたが、平成23年6月より、法制度そのものが変更され、一定の要件を満たした場合のみ、税控除団体として認められることになりました。以下の2つの要件のうち、どちらか1つを満たすことが必要となります。

- 1. 経常収入のうちの2割が寄附によって賄われている団体
- 2. 3000円以上の寄附金を支出した者が、平均して年に100名以上いること

本会は、今のところ1は無理なので、当面は2を目指し、現在、会員もしくは会員外からの寄附を受け付けています。寄附文化を日本の基礎科学に醸成していくためには、寄附者に対する税控除は重要です。一方で、今や、税収が減り国の予算に期待することはどうあがいても無理な時代になりつつあります。日本の基礎科学の未来にとっては、寄附文化の醸成は極めて重要と思います。

寄附文化を作っていく初期段階においては、会員の皆様の協力が不可欠です。上記の寄付の主旨にご賛同いただける会員の皆様には、3000円を目安として、ご寄附をお願いします。寄附には、男女共同参画の活動のために、ジャーナル出版のためなど、目的を明記して頂いても結構です。お振込みはクレジットカード（文面下のボタンから寄付用ページに入

ることができます)、または以下の口座をお願いいたします。口座への振込の場合は、振込をされた旨、学会本部までメールでお知らせ頂き、目的等がある場合は明記してください。

寄付募集の目的(具体的にメッセージ文中に列挙する・・・動物学の振興, 国際連携, 男女共同参画, 動物学情報のアーカイブ化等々)

口座振り込みの場合

三菱 UFJ 銀行 春日町支店 0430526 公益社団法人 日本動物学会 会長 稲葉和男

郵便振替口座 00180-3-495 公益社団法人 日本動物学会

クレジットカードの場合

ご寄付はこちらから

✓ 寄附申込みの Protokol を下記へ変更する。

「寄付申し込み」をクリック

クレジット / 銀行振込 / 郵貯振替の選択

必要事項の入力(寄付者情報・寄付額・特段の用途などについてコメント欄)

事務局へ寄付受付の自動送信

お客様情報

お名前(姓) *	<input type="text"/>
お名前(名) *	<input type="text"/>
住所 *	<input type="text"/>

お支払情報

寄付の目的	<input type="radio"/> 動物学振興のため <input type="radio"/> 国際動物学会議 <input type="radio"/> 男女共同参画 <input type="radio"/> 学会が必要とする活動
金額	3,000円 x <input type="text" value="0"/> <input type="checkbox"/>
	5,000円 x <input type="text" value="0"/> <input type="checkbox"/>
	10,000円 x <input type="text" value="0"/> <input type="checkbox"/>
	その他 <input type="text"/> 円
合計	<input type="text" value="0"/> 円

削除

COVID-19 影響下での支部活動状況

2020/12/9 現在 各支部支部長・庶務

現在新型コロナウイルス感染症の影響で、オフラインの集会在制限される状況になっております。こういった状況下の中で学会や支部がどのようなことができる可能性があるのかの検討材料として、全国の支部の現在の活動状況に関してまとめさせていただきました。

特にオンラインでの講演会の開催などに関しては、本部からの全国会員へのメール配信などを通して、支部活動をより広い範囲に波及させることも可能であります。今後の支部活動の検討材料になれば幸いです。

集計：既にオンライン大会 and/or 講演会実施済みの支部	3
オンライン大会を決定している支部	1
オンライン大会を前向きに検討	2
県の例会は一部実施、支部大会は未定	1

北海道支部（増田支部長）

北海道支部では、昨年度の支部大会が新型コロナウイルス感染拡大により延期となっております。次回は、2021年3月開催を計画していますが、院生や若手研究者、高校生の発表の機会をつくるためにも、オンライン形式で開催するかどうか、前向きに検討しているところです。

東北支部(出口支部長)

動物学会東北支部大会（一般発表・高校生発表）は、当初は7月18日（土）に東北大学農学部（仙台市）で開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症のため、4月9日の支部役員会（オンライン）において中止（延期）が決定された。また、併せて、フォトコンテストの延期も決定された。その後、7月14日（火）の支部役員会（オンライン）において、東北支部大会（一般発表・高校生発表）のオンライン開催とフォトコンテストの開催が承認された。その後、フォトコンテストは11月12日（木）を締切日として実施された（応募数：15件）。また、東北支部大会（一般発表・高校生発表）は12月6日（日）にZoomを用いて実施され、一般発表17件、高校生発表18件（このうち、10件は録画発表、youtubeを使用）であった。

関東支部(深津支部長)

2020年3月に予定されていた支部大会をオンラインで行った。WebEXを用いたシンポジウム（登録者73人）に加えてLINC Bizをもちいたポスター発表（参加登録者217人）を行った。高校生発表は割愛した。8月に公開講演会を同じくオンラインで行った。

本部の大会用の ZOOM ウェビナーライセンスを用いた。参加者は、200人強であった。

中部支部(鈴木支部長)

中部支部では、支部大会(富山大会)を1年延期にして、2021年3月6日に公開講演会「今!キングョがおもしろい」を実施する予定です。基礎生物学研究所の成瀬先生のご尽力により、ウェブで開催します。基生研のオンラインの国際シンポジウム(NIBB-AS International Webinar of aquatic organisms for the basic biology to human disease models)の翌日に開催することにより、割安でウェブ開催を行います。一般市民への発信は、講演会の講演をyoutubeに掲載して、発信する予定です。

近畿支部(寺北支部長)

2020年11月7日に動物学会近畿支部秋の講演会を奈良県橿原市立昆虫館で対面とオンラインのハイブリッド形式で開催した(参加人数:現地(対面)18名,オンライン(遠隔)35人)。また同日、高校生オンライン発表会も開催した(発表数:11演題、参加人数(オンライン):53人)。支部委員会は当初は対面開催の予定であったが、遠隔開催に変更し、2020年11月6日に開催した。

中国四国支部(彦坂支部長)

・5月に予定されていた香川での支部大会(植物学会、生態学会との合同開催)は延期となった。

・次回の支部大会は来年5月に香川で行う予定だが、オンラインでの開催も視野に入れている。

九州支部(岡田支部長)

九州支部では、九州沖縄植物学会および日本生態学会九州地区と共に、各県で例会が合同開催されているが、今年度はその多くがCOVID-19の影響により中止となっている。具体的には、今期予定されている9例会のうち、6例会(鹿児島1回目、宮崎、熊本、佐賀、福岡、大分)が中止決定、2例会(長崎、鹿児島2回目)のみ実施予定、1例会(沖縄)が未定である。長崎例会は12月12日に口演形式で、鹿児島例会は12月12日にオンライン形式で実施される。高校生向けの公開実習(熊本)は既に中止が決定した。2020年5月に九州大学で開催予定だった九州支部大会は、1年後に延期となったが、現在その開催は未定である。

「荏原眞路子研究奨励基金選考委員の選出方法に関する内規」(案)

この選考委員は、募集年度ごとに以下の手順で選出する。

第1条 選考委員会は7名の委員で構成する。この中には、会長が選出した選考委員長1名と外部委員1名以上を含む。

第2条 会長は、専門分野のバランスを考えつつ、募集年度においておおむね60歳以上の日本動物学会理事経験者の中から、本部役員と賞担当理事の意見を聴いて選考委員長1名と選考委員5名を選出する。

第3条 会長は関連学会に、本選考委員にふさわしい候補の推薦を依頼、本部役員と賞担当理事の意見を聴いて被推薦者から外部委員を選出する。

第4条 この内規は理事会の決議をもって改定する。

(付則)

本内規は、202x年x月x日よりこれを施行する。

「OM賞選考委員の選出方法に関する内規」（案）

この選考委員は、募集年度ごとに以下の手順で選出する。

第1条 選考委員会は7名の委員で構成する。この中には、会長が選出した選考委員長1名と外部委員1名を含む。

第2条 会長は、賞担当理事を通して各支部長に会員から男女各1名の委員候補の推薦を依頼、本部役員と賞担当理事の意見を聴いて被推薦者から5名を選出する。

第3条 会長は関連学会に委員候補の推薦を依頼、本部役員と賞担当理事の意見を聴いて被推薦者から外部委員1名を選出する。

第4条 選考に関して、会長が特別に任命した者がオブザーバーとして参加することができる。

第5条 この内規は理事会の決議をもって改定する。

（付則）

本内規は、202x年x月x日よりこれを施行する。

202X年〇月吉日

〇〇学会 御中

選考委員の推薦依頼について（お願い）

〒113-0033 文京区本郷 7-2-2 本郷MTビル4階
公益社団法人 日本動物学会
理事長 稲葉一男

拝啓

貴学会におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私どもは平成13年度より、「社団法人日本動物学会 OM 賞」を設立し、本学会会員である女性研究者の動物科学研究を奨励してまいりました。その後、名称を「日本動物学会女性研究者奨励 OM 賞」と改めております。さらに、平成24年の本学会の公益社団法人化に伴い、本学会会員に限らず動物科学を研究するすべての女性研究者を対象に、この賞を授賞しております。

男女共同参画社会基本法や女性活躍推進法の施行にもかかわらず、依然として、女性研究者がそれぞれの多様な生き方を選択し、能力を十分に発揮できる環境の実現には至っておりません。本賞は、不安定な身分等の理由により研究を続けることが困難な状況にありながら、強い意志と高い志を持って優れた動物科学分野の研究を推進しようとする女性研究者を支援することを目的としています。

従前、本賞の選考は当学会員で構成される選考委員会で審議しておりましたが、選考をより公正かつ透明に行うため選考委員会に外部審査委員を加えることといたしました。そこで、貴学会より1名の選考委員をご推薦いただきたく、お願いする次第です。

選考委員の具体的な役割は、まず書面による評価を行っていただき、その後各委員の評価結果をもとに合議による審議を行っていただきます。詳細については、委員就任後にご説明申し上げます。

なお、ご推薦いただいた方が選考委員とならない可能性もございますがご了承お願い申し上げます。

大変恐縮ではございますが、選考委員のご推薦の可否、可能な場合のご推薦いただく方の氏名並びに連絡先につきまして、2021年〇月〇日までにご連絡いただければ幸いです。

本件連絡先

〒113-0033 文京区本郷 7-2-2 本郷MTビル4階
公益社団法人 日本動物学会 事務局

TEL 03-3814-5461

e-mail: zsj-society@zoology.or.jp

【フォトコンテスト 支部意見まとめ（カッコ内は出された支部名）】

1. 実施自体について

- ・全国展開になるようで喜ばしい（東北）。
- ・開催自体については、皆さんが肯定的（九州）。
- ・地方からの応募の増加と地域の繋がりができるので悪くない（九州）。
- ・フォトコンテストは支部の活性化にもつながる（中部）。
- ・公益社団法人として、動物学の発信、普及、次世代育成を目的とするフォトコンテストは良い案である（中部）
- ・目的を明確にした上で前向きに対応したいが審査作業に負担がかかりそう（北海道）。
- ・地理的に北海道の自然を背景として良い写真が集まる期待がある（北海道）。
- ・本部の下請け的な位置付けなら、トップダウンでボトムアップではないので、「支部活動」ではなく、本部のお手伝いではないか（近畿）。
- ・支部ごとに参加・不参加を決めるような自由度をみとめ、様子を見て参加できるようにしても良いのではないか（近畿）。
- ・動物学会の公益事業が不足しているということか（近畿）。
- ・本部号令で支部活動をすることはどうなのか。本部がすべてやるという案は無いのか（近畿）。
- ・東北の取り組みを紹介して、やろうという支部は支部活動としてやる（近畿）。
- ・想像するとかかなりの仕事のように思われるので、実施する場合は、他の支部活動の見直しも必要ではないか（近畿）。
- ・いいアイデア。各支部で広報・募集・審査を行うことに賛成する（中国四国）。
- ・行うこと自体は賛成。宣伝と審査を行う旨も問題ないと思う（中国四国）。
- ・コンセプトを明示的に記載するべき（関東）。
- ・こういったものに利用したいのか（波及効果を期待）、どういう題材が良いのか（動物の面白さ・すばらしさ）、学会としてどういった理想を持っているのか（動物学会のコンセプトのイメージが伝わるような素材）等を示した方がより良い（関東）。

（生科連の企画との関係）

- ・生科連の企画（つばやきフォトコンテスト）との差別化を図る必要がある（九州）。
 - ・生科連と募集期間を重ねないことが必要（中部）
 - ・生科連に高校生を対象とした「生きものの”つばやき”フォトコンテスト」というコンテストがある（北海道）。
- （メモ：生科連からは応募の機会が増えるとのことで了解してもらった。つばやきフォトコンテストは高校生のみ対象）

2．支部と本部の問題（体制）

- ・コロナの影響で応募者が少なく直ちに全国版というのは負担ではないか（東北）。
- ・支部会員数や地区人口の問題での差の問題（東北）。
- ・支部の若い人たちへの負担感の軽減も大事（東北）。
- ・各支部で審査・表彰し、本部へ推薦 本部が審査して表彰が良い（東北）。
- ・支部毎に作品を集めるのは難しい支部もある。本部一括で集めたほうが良い（東北）。
- ・SNS 機能を利用したものとか、各支部独自の新たな企画を可能にする余地を残してほしい（東北）。
- ・広報活動がかなり大変。一般向けの広報は本部にまかせた方がよい（九州）。
- ・支部会の高校生ポスターに参加されている常連校データを本部に提供し、その集約したデータを元にしてポスターの発送作業を本部で一括してできると効率的（中部）。
- ・募集、応募は本部が行うのが、支部の負担が少ない（中部）。
- ・居住地の支部を明示した上で応募していただき、応募先は本部で一元化（中部）。
- ・支部主催だと開催の負担が大きくなり現実的でない。開催する場合は、本部主催で本部が受付窓口となり、全支部が協力して行うのがよい（北海道）。
- ・それ自体は良いが、本部が企画・実施するものなのか。支部がどのように関わるのかわからない（北海道）。
- ・支部の賞が設定されているので良いが、全国大会の地方予選的な位置付けとならない方が良いのでは（近畿）。
- ・支部と本部の役割分担に異論ない。支部で優秀だったもののなかから本部でさらに評価する方針ですと、評価基準に関して各支部で統一しておく必要がある（関東）。
- ・東北支部との兼ね合いを見て進める必要がある。支部で大まかに審査 優秀作品を本部で受賞作品を決定という感じか（関東）。
- ・最初から本部主催で全国から募集して外部の専門家を交えた一律審査というのでも良い（関東）。
- ・支部に負担がかかりすぎないように、基本的に本部主導で行うことに賛成（関東）。

3．募集内容について

- ・規模が大きくなるので部門を分けても良い（東北）。
- ・絵画や動画とかを最初からやるのではなく、フォトコンテストを1-2年実施してから、追加するぐらいが良い。初回は写真のみ、世代のカテゴリも、小学校3年までと小学校4年以上（～シニアまで）の2区分ぐらい（九州）。
- ・サイエンスのスタンスでは児童や高齢者を区別するのはそぐわない（九州）。
- ・写真の他にスケッチや動画を入れると審査が大変。初回は写真のみが良い。（中部）。
- ・小学生の作品に親の関与を否定することが難しい。小学生以下をスケッチにした方がよい（中部）。

- ・優秀賞をもらうような作品は本人だけではとても無理だ。優秀賞をとるために親や担任がかなり介入することが当たり前(中部)。
- ・動画が溢れている時代なので、いずれは、動画も対象にしたらよい(中部)。
- ・年齢による部門を細かく区切らない方がよい(写真であれば、小学生以下と中高生、一般ぐらいでよい)(中部)。
- ・一人の人が応募できる作品点数を決めておく必要。一人一点が妥当(中部)。
- ・過去に表彰されたもの、他のコンテストに応募中の作品は除外(中部)。
- ・対象として2つのカテゴリ：1つは小学生以下、他方は中学生以上(北海道)。
- ・写真としてのクオリティを求めるのか、希少な動物の写真を歓迎するのか、野生動物のみを対象とするのか(ペットも可とするのか)、野生動物の場合日本国内の動物のみを対象とするのか、動植物園に展示されている動物は対象とするのか(北海道)。
- ・広く動物学の啓蒙を促すのが目的なら、小中高校生を対象に限定でなく、一般の方(プロ写真は除くべき)も対象に加えた間口の広いコンテストが望ましい(北海道)。
- ・何を目的として実施するのかを明確にして、対象とする動物種やテーマをきちんと絞る必要(北海道)。
- ・例えば、北海道の野生生物を対象にしたフォトコンテストを北海道支部で行うという企画なら支部の活動としては面白い(北海道)。
- ・高校には写真部でかなり本格的に撮影をしている生徒もいるで、1. 中学生以下, 2. 高校・大学生, 3. 一般, のカテゴリが適当(北海道)。
- ・シニアも若年もとターゲットが広がると広報も手広くやらないといけない(近畿)。
- ・「次世代育成」として小・中・高・大学生をターゲットにした時、高校生ポスターと同じルートで広報をすると、高校生ポスターと両方を行う意義が薄れる(近畿)。
- ・SNSや動画投稿サイトを活用。学会員でSNSやっている人にはフォローしてもらって情報を拡散、表彰にも「SNS賞」を作ってSNS映えるものを選んで宣伝に使う(近畿)。
- ・スマホからでも簡単に応募できると良い(近畿)。
- ・コンピュータグラフィックスは入れるのか。写真だけにするにしても、画像ソフトによる改変は何処まで許すのかが問題(近畿)。
- ・最初から応募枠をそこまで細かく分けなくても良いのでは。動物学会のスタンスとして、出来るだけ多くの賞を出して、多くの人のモチベーションを上げてサイエンスに引き込むことを想定されているのであれば、その限りではない(中国四国)。
- ・応募してくれる高校生としては写真部や趣味として写真を撮っている一般高校生になり、動物学「研究」の普及にはあまり意味はないかもしれない(北海道)。
- ・写真のみが良い。絵だと生物画の基準が重視されるのか、写生的で良いのか、判断が難しいか。コンセプトを明示的に記載することで回避できるが、審査が難しい。動画もこれもコンセプト次第。例えばインスタグラム等で拡散してもらうことを想定するのであれば、その規定に合わせて募集すれば良い(関東)。

- ・ 1、低学年、2、高校生まで、3、シニア部門、低学年はスケッチという案に賛成（関東）
- ・ スケッチは現物を評価するのは、対面じゃないと厳しい。スケッチをスキャンもしくは撮影したものを提出とされてもよい（関東）
- ・ 写真部門とスケッチ部門、高校生以下と一般（シニア含む）の2x2の計4分野くらいが良い（動画は審査が大変そう）。募集数にもよるが、細分化しすぎると審査が大変（関東）
- ・ 動画は素晴らしい作品が集まると思うが、最初から手広くやると大変。まずは静止画のみで始め、余裕があるなら動画枠を設置するなど、徐々に（関東）

4．募集方法について

- ・ 立派なポスターを印刷して配ると効果が上がる。新聞広告も良い（東北）。
- ・ 「登竜門」：芸術コンペの宣伝サイト <https://compe.japandesign.ne.jp/>（東北）。
- ・ 宣伝と賞品については、お金を少しかけるイメージが良い（東北）。
- ・ 募集と選考が間に合うか心配ではありません（九州）（メモ：1年遅らす？）
- ・ 高校生物の先生が多く所属している「日本生物教育学会」に協力してもらおう（九州）。
- ・ 地元の高校、特に生物部との連携はこれから重要。これを期にメールリストを作るのはいかがでしょうか（九州）。
- ・ 新聞に募集を載せられれば良い（本部負担）（九州）。
- ・ 「日本生物教育学会」に本部からの依頼があると助かる（中部）。
- ・ 最初は応募数が少なくても、授賞作品のHPに掲載するなどの広報+口コミで徐々に広がってくるのを気長に待つ（中部）。
- ・ 各県の教育委員会以外に、科学館・博物館などでパンフレットを置く、地域の広報誌なども効果的（中部）。
- ・ 本部の広報委員会のレベルでポスターを作成し、年次大会の「高校生ポスター」などの常連校に配付する（中部）。
- ・ 科学館や動物園水族館などへの送付（中部）。
- ・ 本部の広報費で写真雑誌や科学雑誌などに広告を出す方が効果的（北海道）。
- ・ 支部のHPに情報を載せるにしても、支部委員等が知り合いの高校関係者等に個人的に連絡するのがよい。ウェブよりも知り合いの先生に言われる方が有効（近畿）。
- ・ webサイトから盗用したものを応募するというようなことを心配。そういうものを表彰すると厄介。画像検索でチェックも限界あり（近畿）。
- ・ 一般向けの広報については、各種フォトコンテスト情報を扱っているサイトや雑誌に掲載を依頼する、というのはどうか。以下、団体、サイトの例：

<https://capa.getnavi.jp/photocon/>

<https://www.photo-asahi.com/contest/entry/>

学生向けには、写真部のある高校が加盟（？）全日本写真連盟の地方支部

<https://www.photo-asahi.com/kansai/> から高校向けに広報も可能（近畿）。

- ・秋の高校生ポスター発表会案内を出す。この時に一緒に送れると楽（近畿）。

5．審査について

- ・審査員の選定も含めて、支部でもかなり詰めることが多くなる（九州）。
- ・審査員は支部役員に限定するではなく、支部の一般会員全員にしたい（中部）。
- ・本人が撮影したことをどのように認識するか。良いものは良いとするか（中部）
- ・本部審査は、最初は理事のみの審査、コンテストの認知度が上がってから、外部審査員の追加を検討すればよい（中部）
- ・審査員は当面、理事が行うのが良い（北海道）。
- ・審査について、最初は理事でもよいですが、写真のクオリティ等も審査基準とするなら、プロの動物写真家の方に加わっていただくのも一案（北海道）。
- ・過去に表彰されたもの、他のコンテストに応募中の作品のチェックは本部がやるのか。断り文句を入れて性善説に任せるのか（近畿）。
- ・他のフォトコンテストに関わっているが、審査はたいへん（近畿）。
- ・東北支部のポスターを見るとどういった基準で審査するのかが明示的には記載されていない（関東）。

6．表彰等について

- ・賞金が出ると応募数が多くなる（九州）。
- ・専門家コメントとともに受賞作をホームページで公表、学会大会にて表彰するなど検討することは良い（中部）。
- ・表彰状＋記念品（写真をプリントしたカップやTシャツ、動物学会オリジナルグッズなど）を贈呈したらどうか（中部）。
- ・優秀作を動物学会 HP や Zoological Science 等の表紙に採用することを視野に入れると、応募作品の権利関係についてのディスクロージャーを最初にしっかりしてする必要（中部）。
- ・賞金（図書券など）が出ると応募数が多くなる（中部）
- ・参加しただけでも何か賞状を出せばよい（中部）
- ・著作権は動物学会に帰属するのか、入賞作品をどのように公開するのかについても議論すべき（北海道）。
- ・表彰を本大会で行っても、実際旅費を使ってまで表彰式に来てくれるかどうか疑問。むしろ入賞作品は毎年の大会プログラムの表紙や裏表紙に採用する方が、応募者は喜んでくれるのではないか（北海道）。

【フォトコンテスト 検討事項 (2020年第4回理事会)】

提案:新型コロナウイルスの状況を見ながら、各支部の意向を尊重した上で実施を目指す。

検討事項:

1. 動物学の振興と次世代育成を目的とする公益事業として、幅広い世代に動物をよく観察し、動物について理解をさらに深めてもらうために動物学フォトコンテストを企画する。
2. 企画全体像の公表は本部が行う。応募、事前広報、審査、表彰、事後広報等については、支部の負担軽減を考え、支部-本部の分担を支部ごとに判断する。
3. 中学生以下、高校生以上の二区分とし、当面はフォトのみを募集対象とする。身近な野生動物、動物園、水族館、ペットの動物を対象とする。
4. 作品は、一人一点とする。過去に表彰されたもの、他に応募中のものは除外することを応募要項に明記する。応募者自身の作品とすること(グループも可)、盗用が判明次第、取り消すこと、公表に関する同意(作品の帰属)をあらかじめ明記する。
5. ポスター、新聞、コンペの宣伝サイト、写真雑誌、科学雑誌、支部HP、日本生物教育学会、地元の高校(高校生ポスター常連、生物部など)、科学館、動物園、水族館などで宣伝する。ホームページ、年次大会でも宣伝する。
6. 高校など教育関係については、これを期にメールリストを作る。
7. 審査基準は、趣旨にある「動物をよく観察し、動物について理解をさらに深める」上で優れた作品とする。プロ写真家の作品のようなクオリティは求めない。
8. 審査員は、支部審査(支部委員または支部会員全員)、本部審査(支部で審査が不可能の場合)のどちらかを支部により選択する。時期を見てプロ写真家など外部審査員も入れる。
9. 支部ごとに優秀作品を表彰する。本部では最優秀作品などを選ばず、支部優秀作品のみを広報する。将来的に、優秀作品の中から専門家に少数選んでもらい、〇〇賞などを設けて表彰する。
10. 優秀作品には、賞金、賞状、賞品(動物学会グッズ、図書券など)を贈呈する。専門家コメントを添える。ホームページで公表する。
11. 広報、審査員、賞品には予算を投入する。